

編集室から

春は異動、そして出会いと別れの季節です。僕自身、転勤族の父の人事異動に伴って移り住むため、全国各地を旅したのもこの時期でした。転勤とは無関係な人と雖も、学校の卒業・入学で必ず訪れる出会いと別れとは無縁ではありません。卒業・桜といった言葉で数々のヒット曲が古今生まれているのは、日本のこのような国民的行事が背景にあるからでしょう。

さて、このニュースレターもそんな事情から無縁ではありませんでした。現在はJR九州の超豪華寝台列車「ななつ星」乗車記を、レギュラーとして連載執筆中の溝口さんが静岡県庁職員として登場されるのは、今月号が最後です。

溝口さんは、県庁を少し早めにご卒業され、4月1日からは小山町にて、同町まちづくりのために奔走される道を歩まれます。読者の皆さまは既にご承知ですが、初めて公募された由布院の観光協会事務局長に出向された時は、同県の人事制度を変えて行かれています。本連載は当分、継続していただだけそうですので、引き続きご活躍を全国の皆さまと共有して参りたいと存じます。

また数年前、ご寄稿を頂戴した栃木県の大森さんは、大学で研究職に就かれるそうです。ご寄稿を頂戴して以来、その卓越した実績と多彩な経歴からのご経験を、ある研修で毎年ご披露を頂き、主催者・受講生から絶大な敬意を集めておられました。当て職依頼ではなく、ご本人への出講依頼ですので、先方の人事課は先例が無く対処に困られたかも知れません。

かつて一枚の赤い紙で若者が戦地に赴きました。今は命まで取られる事は無いかも知れませんが、辞令という動かし難い制度を自ら多少なりとも変えてこられたお二方が、偶然とはいえ同じタイミングで道を変えられる事に、しみじみと思いを致しています。(は)



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川畠さんが「能登の夜市」の姉妹店を開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

もちろん、川畠さんご自身もお店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00~24:00

金曜17:00~28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2014/04

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2014/04

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

卯月



金沢城公園にて
「石垣と夜桜」
by hama

寄稿『ありそうでなかった!』

ジオガシ旅行団 鈴木 美智子

こんにちは!私たちは伊豆半島で活動している「ジオガシ旅行団」と申します。

伊豆半島ですが、どこにあるか皆さまご存知でしょうか?そこでちょっとご説明させて頂きます。地球は十数枚のプレート(巨大岩盤)で覆われており、私達の住む日本は、そのうち四つのプレートの上に乗っかっています。静岡県東部に位置する伊豆半島は、なんと日本列島のこだけフィリピン海プレートに乗っています。今から約二千万年前、小笠原諸島あたりの海底で産まれた火山は、噴火を繰り返しながら年に四センチずつ日本列島に近づき、今の形になりました。現在西ノ島の噴火が起きていますが、まさにあのような感じですよ。

伊豆半島では、そうした海底火山の隆起した様や、陸上火山、山奥で見られる海の名残、など様々な景色を見る事ができます。理由を知った時からそれまで日常だった風景が雄弁に語りかけていた事に気づき、その体験を多くの方と共有し、景色の美しさ、成り立ちの奇跡的な理由を慈しみ、楽しみ、観光に活かしたいという思いから「ジオガシ旅行団」は始まりました。

本来観光の持つ「観知る醍醐味」と、住まう人の「誇り」の再確認を提案。「食べる」という日常の行為を通じ自分事としてもらう。そこから得られた「!」から実際に足を運びたくなくなり、他と共有した

濱のつぶやき 『殻を破る』

「求めよ。さらば与えられん。」
新約聖書・マタイ伝の言葉である。

講演の機会を頂戴したとき、最後にご紹介するパートに、思考習慣病がある。生活習慣病とは、なんとなく繰り返り返している日々の暮らし方(生活習慣)が原因で病に陥ること。思考習慣病とは、無意識に繰り返している「考え方」が原因で正常ではない状態に陥ることだ。

生活習慣病に自覚症状がほとんどなく、それが顕れたときは既に末期であるように、思考習慣病にも自覚症状が無い。しかし、周りにいるものは直ぐに気付く。いつの間にか自分の店からお客がいなくなっていくたら店主の思考習慣病を察した客が足を遠ざけた結果である。生活習慣病の可能性は、健康診断で客観的に判断してもらえない。思考習慣病は、自分の発する言葉から可能性が見える。「不平・不満・愚痴・泣き言」が多いと、可能性が高い。一方、「感謝・敬意・ありがとう」が多いと、元気である。

こんな話をしているわが身も時に妻から手厳しく叱責を受ける。「また不満を口にした!」と。習慣とは恐ろしいもので、本当に自覚症状が無い。言葉として発してしまっても、その音声信号に気付くことができない。だからこそ、習慣になって繰り返す病の言葉を発し続け、益々感覚が麻痺していく。

自分の場合、発症はかなり前らしい。いつか気付くだろうと妻は自己改善を信じ待っていてくれた。処が過日、このままでは貴方のためにならないからこれから

くなる仕組み作りを行っておりです。そのツールとして「ジオ菓子」が開発されました(写真右)

景色を模した手作りお菓子(クッキー等)と、その景色の成り立ちの解説(日本語/英語)、さらにその場所へ足を運べる様、巻物の地図付き。

風景を、可視化ならぬ、菓子化してしまつた「ジオ菓子」を用い、実際にその場所を訪ねるツアーも開催、伊豆半島認定ジオガイドの私たちがご案内します。

ありそうで無かつた『「観知る楽しさ」を提案する体験型お土産ツール』。くわしくは<http://geogashi.com>を覗いてみて下さい。

ネット販売も行っておりますが、伊豆半島の道の駅始め十四箇所販売しております。ぜひ伊豆半島へ遊びに来て下さい!



【プロフィール】
(すぎき みちこ)

デザイナー。地域の個性を活かした商品づくりを支援。ジオパークを目指す伊豆半島を応援するプロデューサーも手がける。

は、嫌だけどその都度指摘させて頂きますと宣言を受けた。最初はムカツとくる。しかし自らの言動一致のためだと振り返ると、妻の指摘は中々のを得ている。ムカムカする感情をそのままにして、そうやって自己を観察していくと、どうやらふと油断した際に病言葉が出やすいようだ。ということは、奥底が病状態なのである。表面的に繕っても、やがて出るべき所・人の前に出れば、簡単に見破られてしまつ。ああ、なんと恐ろしいことか。

少し前から、単身赴任先で自炊を始めた。これまで多忙を理由に一週間分のおかずを作ってもらい月曜に持参していた。手前味噌だが、妻の手料理は美味い。いざ自炊を始めると、これがまた大変なのである。失敗の連続。時間のやりくりと精神力。自分ひとりなので、つい手軽に済ませうとしてしまつて怠り心。疲れていても家事に手を抜かない女房の凄さは、やってみなければ判らない。

「自分の殻を破る」という。それにはこれまでの生活習慣・思考習慣の何処かを変えなければならぬ。何処を変えれば殻を破れるのか。最初から判らないから、思い立つた処からやり始めるしかない。経営者が家事から始めるのは、一見アホらしく思えるかもしれない。しかしそれも自分の生活・思考習慣の一部をなしている。

求めて何かを始めれば、必ず何かにぶち当たる。そして、気付きを与えられる。しかも、全く思わぬところからそれはやって来る。気付きという仕組みが、どのようなメカニズムなのかは判らない。しかし気付きの神様は一石で何鳥も与えようとしてくれているようだ。

「感謝とは、するものではなく、溢れて来るものである」と聞いた。今、この格言を体感している。



きただより63 弘前大学地域社会研究会 上村 康之
『 高速バス事故と寝台列車廃止に思う 』

この3月3日、北陸自動車道上り線小矢部川サービスエリアにて、仙台発加賀温泉行の宮城交通の夜行高速バスがトラック2台に追突し、運転手と乗客の2人が亡くなる事故が起きた。最前列にいた乗客が、運転手の異変に気がつき起こそうと声がけしていたときに事故が起きた。この方は、震災に遭い宮城県から石川県に家族を仮設住宅に残して単身赴任。息子の高校卒業式に出席して戻るバスでの事故と、やるせない思いに駆られた。

約2年前の2012年4月29日、関越自動車道上り線藤岡ジャンクション付近で起きた高速ツアーバスの居眠り運転事故により乗客45人のうち7人が死亡、38人が重軽傷をおった。かねてから、高速ツアーバスの安全性に関して疑問視はされていた折、この事故がきっかけとなり、国土交通省では2013年7月末に高速ツアーバスを廃止し、8月から新高速乗合バス制度に集約し、安全対策を強化した。

関越道の事故の記憶がまだ強烈に残るなか、今回の事故である。まず何よりも、宮城交通という乗合バス事業者が事故を起こしたことの重大さである。テレビ局のワイドショーでコメンテーター（宮城県出身）が「宮城交通といえば、宮城県内をほぼ独占しているバス会社。子どもの頃から馴染みも信頼感があっただけにショックを受けた」と発言していた。私も仙台と東北の各都市間バスを利用し、宮城交通にも頻繁に乗車してきたのでコメンテーターと同感である。

亡くなった運転手は当日の運行基準を守っていたが、11日間連続勤務、2月の休日が4日しかなかったと報道されている。これは宮城交通だけの問題なのか、どのバス事業者も同様の実態なのか、高速バスを利用して大丈夫なのかと心配になってくる。高速バスを利用する理由は、他交通機関と比較して圧倒的な料金の安さという点が一番であろう。その安さを重視するあまり安全性と引き換えにしているともいえる。

一方、3月14日には寝台列車「あけぼの」（青森～上野）が廃止となった。

1970年に運行をはじめ、東北地方の日本海側を走り続けた。特に新幹線が通わない秋田県の大館、能代、山形県の酒田、鶴岡といった地域にとっては、東京への貴重な交通手段であった。JRは廃止理由を「乗客の減少、車両の老朽化、他の交通機関との競争激化」をあげているが、国鉄時代からの車両を耐用ギリギリまで使用し予定通り廃止に至ったのではないかと思われる。旧国鉄時代に毎年のように運賃と料金の値上げを繰り返し、高額な乗り物になり利用者離れが顕著になった。寝台列車の利用者層の多くが深夜の高速バスにシフトしたが、寝台列車に需要がなく競争力がなかったとは思えない。廃止するまでに講じる手だては、JRだけでなく沿線地域にもあったはずだ。

寝台列車廃止を惜しむ声には、「朝早くから東京で動ける」「旅情を感じる」などが多くあげられている。それよりも、どの交通機関も100%安全なものはないにせよ、寝台列車は高速バスに比べ「安全・安心度が高い」といえること、さらに「高齢者に優しい乗り物」という点からも、存続させる価値があったと思うがいかがであろうか。

『 春と言えば 』
株式会社GARBAGE代表 川島 嘉浩

『プロ野球開幕』これが私にとっての“もう春なんだなあ”と感じさせてくれる季語です。身をちぢこませていた冬が終わり、ポカポカ陽気の中ビールなんか呑みながら野球観戦したり、または鼻厘のチームの結果を深夜のスポーツ番組で確認しながら、一喜一憂する。

そんな楽しい毎日が待ち遠しかったのです。他にも、

- ・桜開花
- ・卒業式、入学式
- ・送別会、歓迎会

等々春を感じる様々なイベントがあるかと思います。

春というのは、『終わりとともに新しく何かはじまる』という唯一の季節であり、ワクワク感をもたらしてくれる季節なんですね。

と長くいだりからスタートしましたが、私もこの春に新たな終わりとはじまりを考えています。

まず何を終わらせるか？それは「タバコ」です。20年以上片時も私の傍にいてくれた唯一の存在であるタバコとの決別を決意しました。理由は、消費税増額などもありますが、一番は「健康で長生きしたいなあ」と思ったからです。今3歳の娘のためにというか、私自身が娘の成長をずっと見ていくことが何よりの幸せなんです。

そのために

- ・持っているライターは全て捨てる
- ・タバコの誘惑がある場所(呑み屋、喫煙所)、人にはなるべく近づかない
- ・もっと言えば現金を持たない。ただコンビニでスイカでも買えますが、を実践します。

私自身もどこか習慣や惰性で吸っている感もありましたので、自信ありませんね。

そして何を始めるか？「ジョギング」です。日本全国ジョギング、マラソンブームですが、私もご多分にもれず始めようと思います。『健全な魂は、健全な肉体に宿る』と言います。今年42歳の私が今後30年会社を導き、走りぬいていくには、タフで折れない心と肉体が必要です。すでに毎朝近所の都内でも随一の大豪邸群を横目に見ながら、将来の自分をイメージして“妄想ジョギング”からスタートしています。長年部活をしていたので、「長距離走＝毎日走らされる」というトラウマめいたものがありました。タイムに囚われず散歩の延長と考えるとこれはこれで楽しいものです。

さて皆さんはこの春なにをはじめますか？

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』

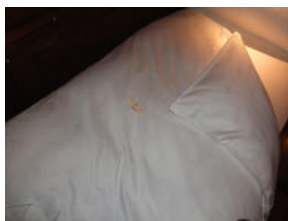
ななつ星の旅(その6) 静岡県職員 溝口 久

列車は食事の間中、由布院と南由布の駅を往復していた。その内に雨が降り出してきた。由布院駅に、小生が由布院の親戚と言っている井尾ファミリーが待っていてくれた。食事が済んだ後、しばし由布院駅に七つ星は停車した。出発は23時過ぎだ。それまで2時間ほどの時間がある。小生のみが下車して井尾ファミリーと町内のバーに向かった。井尾君は小生が由布院観光総合事務所事務局長を務めていた時に、大学を出て新採として事務所に入ってきた青年だ。あれから17年の年月が過ぎ、今は豆腐料理店「市ノ坐」<http://www.ichinoza.jp/>を切盛りしている。***大豆と水とにがり。たったそれだけの材料で作られる豆腐はヘルシーで体に優しく、シンプルが故に変幻自在な食べ物です。“田中市”と呼ばれる湯布院のこの地に、そんな伝統食を真ん中に据え、人々が語らう食事処「由布院 市ノ坐」を開きました。***と挨拶のあった店もすでに開業5年である。バーでひとしきり話したあと由布院駅に戻った。由布院が駆け出しの頃、旅行社に「由布院には、何がありますか?」「…す、ススキがあります」と答えていた昭和40年代。それが今では行きたい温泉地ランキングには常にベスト3に入るまでになっている。そのススキがダイナミックに由布院駅に生けられていた。ななつ星の車体をバックに何やら誇らしげに見えた。

ななつ星の603号室に戻るとソファがベッドに姿を変え、その上には折り鶴とパジャマが用意されていた。ななつ星には風呂の用意はない。檜風呂ならず檜シャワールームが用意されている。

シャワーヘッドはこれまで見たこともない大きなものだ。バルブをひねった時に冷たい水は出てこない。ただちに適温のお湯が出てくる。排水弁機構が組み込まれているらしい、メーカーの実績でもわずかな高級ホテルに取り付けただけで、列車はもちろん初めてとのこと。

立ってのシャワーはもしも急停車があれば、転倒もあることから椅子が用意されている。椅子に腰掛けてのシャワーという人生初の体験となった。大きな水の束が



降り注ぐと同時にシャワールームは一気にヒノキの香りに包まれた。

シャワーの水は、定員30人全員が想定通り使って、3泊4日もつのだろうか。尋ねると「いえ、もちません。2泊目の夜、お客さまが旅館に泊まられているときに、鹿児島車両基地に入れて、水を補給して、機関車にも燃料油を入れます。」とのことだった。そうそう、七つ星はディーゼル機関車なのである。

ベッドの方向は枕木方向ではなく進行方向になっている。新幹線同様のフルアクティブ制御の制振装置を組み込んであるものの、線路の継ぎ目がわからないとまではゆかない。停車後に動き出す時には、列車の中にいることを思い起こさせる。目が覚め車窓に目をやると所々の人家に明かりが見え、そこにななつ星を見ようとする人の姿がチラホラ見える。真夜中というのに。

徐々に明るくなり窓から光が差ししてくると日南海岸を列車は進んでいた。

そして、止まった駅は都農だった。朝の食材供給のため停車したのが都農町だ。農の都っていう名に相応しい採れたて野菜が積み込まれた。

都農町には都農ワインがある。都農の土質は、火山灰土壌の「黒ボク」で排水性には優れているものの、ブドウが必要とする、カルシウムやマグネシウムなどのミネラル分が乏しい。都農ワイナリーの牧内農園では、積極的に堆肥を利用している。「ぶどうはやせた土地でよく育つ」ということを聞いたりするが、ここでは顆粒状の土をつくり、ぶどうの毛細根が張りやすい環境を整えることで健全なぶどうづくりをしている。「すべては“世界の都農ワイン”となる日のために。ぶどうの産地は宮崎県都農町産100パーセントです。まさに風土を表現する日本のワインです。」を売り文句に。

その地の野菜に間違いはないと選び抜いたのだろう。水々しくシャッキとした歯ごたえに、素材そのもの甘味を感じる野菜達に、ふわふわとまるで雲をつかむような口ざわりのオムレツが後を追う。ななつ星の旅の二日目のスタートに相応しい朝食だった。(つづく)

